プロレタリア文学史　上巻

山田清三郎

理論社

プロレタリア文学史(上)

著　　者　山田清三郎
発 行 者　小宮山量平
発 行 所　株式会社 理論社
<営　業>　東京都千代田区神田神保町1－64
振替東京95736 電話(294)6504～5
<編　集>　東京都新宿区若松町104
電話 (203) 5791～5
発　　行　1969年1月 第5刷
定　　価　550円

まえがき

わたしは、この本を、文学にすこしでも興味と関心をもっているひとなら、誰にもわかってもらえる文学史でありたいとねがいながら、かいた。

わたしは、何度ペンをおいて、この本をよんでくれる人たちの顔を、眼にえがいたかもしれない。渋い顔がうかぶと、わたしは、あわててかきためたものをよみかえす。わかってもらえるようにと手をいれる、かきなおす。おもいえがいた顔がほぐれているときには、たのしい気持になった、筆がすすむのであった。

わたしは、はじめ、いわゆるプロレタリア文学だけの歴史をかく予定であった。そして、じっさいにも、かなりかきすすめてしまったのである。かきすすめてから、わたしは、ゆきつまった。いうまでもなく、プロレタリア文学は、あるとき突然にうまれたのでも、成立したのでもない。それは、日本資本主義の発達をはいけいにし、わが国労働者階級の成長にともなって、おこったものである。プロレタリア文学の成立・その発展・そして、ファシズム時代の敗退現象——それらのすがたとその意義を、誰にもなっとくのいくように、しってもらうためには、どうしても、明治いらいの文学の発展を、前景にしめすとともに、プロレタリア文学運動成立いごにおける、他の文学とのかんけいにも、ふれることが必要だと、おもったのである。さらにまた、現在、日本の文学が、当面しているだいじな課題、たとえば国民文学にかんする課題などの、解決・促進に役だつためにも、そ

の努力は、さけてはならないと、かんがえられたからである。さらに、もう一歩すすめていうならば、こんにち、日本民族の解放と民主主義のすべての期待を背負っている日本労働者階級は、すくなくともこれだけの幅のものを、直接に、自分たちの歴史としてうけとめる立場を確立しつつあるといえるだろう。

これは、わたしにとっては、たいへん重い仕事であった。しかし、わたしは、あえてこの重荷を負うことを決心した。わたしは、日本文学学校の教壇にたったとき、ひるまは、いろんな職場ではたらき、週に二回、この夜間の学校にかよってくる若い男女の生徒たちの、文学についてしんけんに学ぼうとするいきいきとしたその眼に、その表情に、わたしのこの仕事をはげます、つよい光をみた。わたしは、この仕事について、かれらに、何ひとつ話したのではない。けれども、わたしは、それをかんじた。そして、わたしも、文学学校の生徒に若がえったつもりで、勉強しながら、この仕事にとりかかった。

しかし、やってみると、やはりたいへんな仕事であった。わたしは、何度か、もとのプロレタリア文学史だけにひきかえそうかとおもった。しかし、ともかくも、この上巻を、まとめあげることができた。そして、下巻のかなりの部分まで、いま、筆をすすめている。

下巻の完成をみるまで、それは、つずくこととおもうが、わたしは、この仕事で、多くの人たちの援助をわずらわした。たとえば、『青踏』のことでは、平塚らいてうさんと生好玲子さんから、教えをいただいた。直接たずねていって話をうかがった人、手紙一本で親切な返事をいただいた人も、すくなくない。多くの文学史家の労作からも、学ぶものが多かった。資料の蒐集に協力してくれた友人たちの好意も、わすれられない。ともすれば、ひるもうとするわたしを、たえずはげまし、勇気ずけてくれた人に、理論社小宮山量平氏、友人松本正雄その他

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

がある。それらすべての人たちに、わたしは、こころからの感謝をささげる。

それらのことがなかったならば、わたしのこの仕事は、とうていつずかなかったかもしれない。しかし、この本の内容にかんするかぎり、わたしのかんがえにしたがってかいた。わたしのかんがえには、いたらぬもの、独断や、あやまりも、さけえられなかったであろう。また、みおとしもあるとおもう。これらのことでは、大方の御叱正を、おねがいする。

かつてわたしは、『日本プロレタリア文芸運動史』（一九三〇年）および『日本プロレタリア文芸理論の発展』（一九三一年）の二著をかいた。わたしは、これにつずいて、『日本プロレタリア文芸作品史』を、かく予定で、準備中投獄された。その前後五年にわたる獄中生活で、わたしは日本近代文学を多少とも系統的に読む機会をもつことができた。それがこの仕事のために役だつことになったのは、わたしにとって、感慨ぶかいことである。

さいごに本書をかざる数々の写真の、ほとんど多くを日本近代史研究会の資料に負っていることをしるし、御好意にたいする深い謝意を表して筆をおく。

一九五四年四月

山田清三郎

著者略歴

一、一八九六年京都市に生れる。学歴はない。少年時代より各種の勤労と労働に従う。

二、一九一八年東京に出る。一九二二年伊藤忞と共に『新興文学』発刊。いらいプロレタリア文学運動に投じ、一九二三年『種蒔く人』同人、その後『文芸戦線』『前衛』『戦旗』の編集にたずさわる。

三、一九三一年二月治安維持法で検挙、同年一一月保釈、一九三四年八月――一九三八年二月治維法及び不敬罪で懲役。

四、一九三九年――一九四五年「満州」で生活（転向時代）。

五、一九四五年――一九五〇年ソヴェトで抑留生活。

六、著書「ソヴェト市民生活の現実」（青木書店）小説「明けない夜はない」「転向記」全三巻（理論社）小説「現場をみた人」（新読書社・改訂版春秋社）「ばあちゃん」〈村上国治の母〉（新日本出版社）

目　次

まえがき……1

I　明治新文学の黎明期から硯友社ならびに「紅露」の時代まで（一八六八―一八九二）……13

1　はしがき……15
2　日本資本主義の成立と労働者階級の生いたち……16
3　明治初年の文化的先覚者……20
4　ジャーナリズムの発生と文学……24
5　生きのびた戯作文学と仮名垣魯文……27
6　自由民権運動と文学の動き……29
7　政治小説をめぐって……35
8　坪内逍遥の「小説神髄」……40
9　「浮雲」と二葉亭四迷……42
10　硯友社の誕生とその文学態度……47

11 明治二〇年後の社会情勢……50
12 硯友社の文学……55
13 幸田露伴の理想小説……59
14 森鷗外の訳業と「舞姫」など……62
15 本章の要約……67

II 初期浪漫主義から自然主義・社会主義

文学の発芽まで（一八九二―一九〇三）……69

1 日清戦争の直前から日露戦争の直前の社会……71
2 初期浪漫主義と北村透谷……78
3 田岡嶺雲と高山樗牛の評論……84
4 日清戦争後の文学――眉山・鏡花・柳浪・一葉……88
5 社会小説と内田魯庵・徳富蘆花……94
6 三〇年代の通俗小説・家庭小説……99
7 「紅露」の時代おわる……100
8 自然主義の気運おこる……102
9 社会主義文学の発芽……108

Ⅰ 自然主義の勃興と反自然主義抬頭の時代（一九〇四―一九一二）……113

10 本章の要約……111
1 反戦・平和運動と『平民新聞』……115
2 木下尙江の社会主義小説……120
3 二つの反戦詩・『明星』の浪漫主義……124
4 日露戦争後の客観情勢……129
5 「暴動時代」――社会運動の発展……132
6 自然主義の勃興とその理論……137
7 島崎藤村の「破戒」のころ……139
8 田山花袋の「蒲団」など……145
9 国木田独歩と後期の作……149
10 白鳥・秋声らの自然主義と二つの農民文学……152
11 漱石と鷗外の反自然主義……156
12 永井荷風と谷崎潤一郎……162
13 大逆事件と石川啄木……166

14 本章の要約……174

Ⅳ 理想主義・人道主義文学の時代と「新思潮」派の抬頭（一九一二―一九二〇）……177

1 第一次世界大戦と日本の情勢……179
2 『白樺』の創刊とその文学運動……183
3 武者小路実篤の作と人……186
4 志賀直哉とその理想的人間像……189
5 有島武郎の二つの作品……192
6 女性解放の文芸雑誌『青踏』の運動……197
7 善郎・百三など人道主義の系列……202
8 中条百合子の二つの作品……204
9 日本資本主義の矛盾の拡大と階級闘争の激化……207
10 プロレタリア文学運動成立前夜の文壇分布図……212
11 菊池寛・芥川龍之介の初期の作……214
12 本章の要約……222

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

V 労働者作家の出現・民衆芸術の主張・日本社会主義同盟の結成（一九一七―一九二〇）……225
1 プロレタリア文学の前駆的作品……227
2 わが国最初の労働者作家の出現……231
3 宮地嘉六の「或る職工の手記」その他……234
4 宮島資夫の「坑夫」「山の鍛冶屋」……237
5 内藤辰雄と吉田金重の作品……244
6 新井紀一の「友を売る」……247
7 前田河広一郎の「三等船客」「マドロスの群」など……249
8 民衆芸術論と労働文学の主張……253
9 宗教文学と大衆文学……258
10 日本社会主義同盟の結成……260
11 本章の要約……263
VI プロレタリア文学運動の成立・『種蒔く人』の時代へ（一九二一―一九二三）……265

1 『種蒔く人』うまる……267
2 『種蒔く人』の諸活動……271
3 『種蒔く人』とプロレタリア文学運動……274
4 『種蒔く人』の周辺……277
5 『種蒔く人』時代の作家と作品……282
6 金子洋文の「地獄」その他……285
7 中西伊之助の「赭土に芽ぐむもの」……289
8 今野賢三・加藤由蔵の作品……291
9 細井和喜蔵の「女工哀史」「工場」その他……294
10 山田清三郎と岡下一郎の作品……298
11 平沢計七の作品をめぐって……300
12 麻生久・山川亮・藤井直澄の作品……304
13 小川未明・秋田雨雀のこの時期の作品……306
14 江口渙・藤森成吉の転換作……308
15 解放戦と芸術運動……314
16 本章の要約……317

Ⅶ　プロレタリア文学運動の波紋（一九二一―一九二三）……319
1　文学陣営の対立と『種蒔く人』……321
2　プロレタリア文学否定の闘将菊池寛……324
3　有島武郎の「宣言一つ」とその死……327
4　「ブルジョア」文壇の沈滞・横光利一の「日輪」……332
5　関東大震災とプロレタリア文学運動の一時的挫折……335
6　『種蒔く人』余録……339
7　初期プロレタリア文学作品の意義……346
8　本章の要約……349
索　引（人名・事項）……(1)

I 明治新文学の黎明期から硯友社および「紅露」の時代（一八六八―一八九二年）

上から逍遙・二葉亭・紅葉

1 はしがき
2 日本資本主義の成立と労働者階級の生いたち
3 明治初年の文化的先覚者
4 ジャーナリズムの発生と文学
5 生きのびた戯作文学と仮名垣魯文
6 自由民権運動と文学の動き
7 政治小説をめぐって
8 坪内逍遙の「小説神髄」
9 「浮雲」と二葉亭四迷
10 硯友社の誕生とその文学態度
11 明治二〇年前後の社会情勢
12 硯友社の文学
13 幸田露伴の理想小説
14 森鷗外の訳業と「舞姫」など
15 本章の要約

逍遙の"当世書生気質"

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com